

九州大学百年の宝物

九州大学百年の宝物刊行委員会

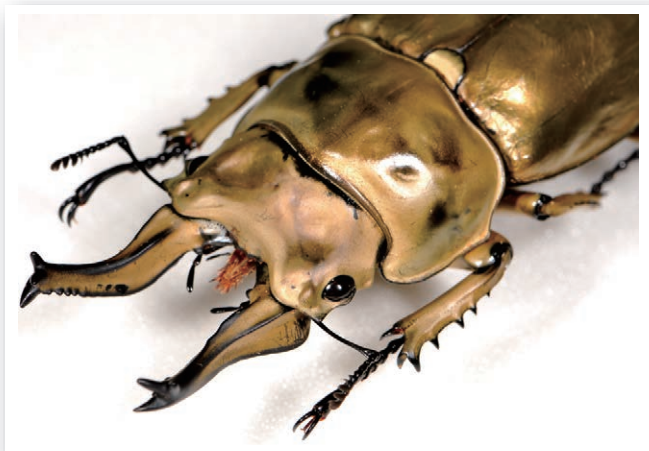
<https://hdl.handle.net/2324/1526202>

出版情報：2011-02-25. 丸善プラネット
バージョン：
権利関係：



第二章

生命の神秘を描き出す多様な標本群



オウゴンオニクワガタ

九州大学には、日本国内だけでなく主としてアジア・太平洋地域から収集された膨大な植物・動物・昆虫・骨格の標本群がある。自然史系の標本収蔵数としては国内最大で、これらの中には新種記載の際に用いられたタイプ標本も多数あり、現在でも研究用に国内外からのタイプ標本貸出し依頼は後を絶たない。

本章では、そのうち代表的なコレクション一三件を紹介する。おもなものとして、ミクロネシア・ニューギニアを中心とした南洋植物の「金平コレクション」、戦前の外地演習林植物を中心とした「初島コレクション」、魚類の生活史標本が充実している「内田コレクション」、約四百万点を誇る「昆虫類一般標本コレクション」等昆虫標本類、日本人起源論に用いられ、膨大な人骨標本を含む「日本有数の骨格資料」等がある。関連資料として、昆虫学だけでなく本草学に関する和洋の貴重な古書コレクションからなる「江崎文庫」がある。

矢原コレクション

■ 概要

受入…二〇〇八年十一月

数量…約一万点

収蔵場所…総合研究博物館植物標本室

旧蔵者…理学研究院教授矢原徹一^{てっかず}

■ 受入経緯

矢原徹一は、国内では屋久島など、国外ではメキシコ、ブラジルなどにおいて顕花植物・シダ植物の調査を実施し、約一万点の標本資料を収集した。九州大学の総合研究博物館設立にあたり、これらの標本資料を寄贈した。

■ 特色

矢原は、国内外の顕花植物・シダ植物の分類学的研究を通じて、四二の新種・新学名を発表した。矢原コレクションには、これらの根拠となる標本資料が含まれている。たとえば、屋久島の資料を

もとに二〇〇八年に発表されたヤクノヒナホシに
関しては、九州大学に正式基準標本（ホロタイプ）
が収められており、その重複標本（アイソタイプ）
が東京大学総合研究資料館に収められている。

矢原コレクションには、メキシコ、ブラジルなど
新大陸の植物標本が数多く含まれている。わが国
の他の植物標本室には、新大陸の植物標本はきわ
めて少ない。矢原コレクションには、ステビア属な
どを中心に、二六の新種を含む約三千点の新大陸
植物標本が含まれており、国際的にも貴重な研究
資料である。

■ 公開

総合研究博物館植物標本室で閲覧可能である。
（矢原 徹一）

参考文献

Yahara, T., Tsukaya, H., “*Oxygyne yamashitae*, a new
species of Thismiaceae from Yaku Island, Japan”, *Acta
Phytotaxonomica et Geobotanica*, 59(2), 2008

Soejima, A., Yahara, T. and Watanabe, K., “Thirteen
new species and two new combinations of *Stevia*
(Asteraceae : Eupatorieae) from Mexico”, *Brittonia*,
53(3), 2001



ヤクノヒナホシ (*Oxygyne yamashitae* Yahara & Tsukaya)

2008年に発表された屋久島固有の新種。本種の正式基準標本（ホロタイプ）は、矢原コレクションの一部として、総合研究博物館に保管されている。

かねひら
金平コレクション

■ 概要

狭義には、(一)ミクロネシア産さく葉標本一五〇科六九〇属にまたがる五三四〇点、(二)ニューギニア産さく葉標本一四五科六四二属にまたがる二六二点、(三)そのほか、戦前の九州大学外地演習林や国内のさく葉標本など、合計一七〇〇点余を金平コレクションという。さく葉標本の採取と並行して、国内、台湾、アジア、オセアニア、北・南米、アフリカ、その他地域から木材標本(材鑑標本)も収集され、その数は五〇〇〇点を超えている。そこで広義には、さく葉標本と材鑑標本



金平亮三著
『ニューギニア探検(訂正版)』
昭和15年1月の博多駅出発から5月の神戸入港までのオランダ領ニューギニア紀行、ニューギニアの植物(概説、植物界、植物相、探検結果、有用植物)、後記(住民、動物、産業)が記述されている。王冠鳩を水炊きにしたり重い火喰鳥を二分して運ぶくだりがあり、紀行文を読むだけでも当時の住民や産業のことがわかり興味深い。

■ 経緯

昭和三年三月、台湾総督府中央研究所林業部長であった金平亮三が農学部林学第二講座担当教授として迎えられた。金平教授は、台湾時代から木材の解剖学性質と熱帯植物を研究し、『台湾樹木誌』、『熱帯有用植物誌』、『大日本産重要木材の解剖学的識別』などの著書があったが、九州大学赴任後も研究の主体はこれらの分野であった。昭和五年から一三年にかけて度々南洋諸島へ渡航し、ミクロネシア植物相を調査するとともに、昭



金平亮三(1882~1948)
南洋植物に関する著しい業績によって、昭和11年には日本農学賞、昭和12年には帝国学士院賞を受賞した。滋賀県東近江市に設立された西堀榮三郎記念「探検の殿堂」には近代日本の探検家50人のうちの1人として紹介されている。

を合わせて金平コレクションと呼んでいる。

和一二年にはオーストラリア領ニューギニア、昭和一五年にはオランダ領ニューギニアを探検して植物を採取し多くの新種を発見している。これらの調査で採取されたさく葉標本、および外地演習林に関連するさく葉標本は「金平コレクション」として保管されている。同コレクションに付随するものとして、前述のように国産材・外国産材の標本が収集された。木材解剖学者にとって金平コレクションとは材鑑標本を指す場合が多い。

■ 特色

ミクロネシア産さく葉標本には一六〇点、ニューギニア産さく葉標本には五九点のタイプ標本が含まれている。このことが本コレクションを国内外に著名なものとしており、その学術的価値は極めて高い。材鑑標本は、九州大学演習



さく葉標本

金平コレクションには約230点のタイプ標本がある。写真はそのうちの1つで、金平が1930年にヤップ島で採取したものである。ニューギニアへ同行した初島住彦(当時林学第4講座助手)によって、*Rhaphidiphora kanehirae* Hatusimaと命名された。

■ 公開

林、森林管理局、旧台湾総督府で採取したり、海外の研究機関との交換で収集されたもので、出所・由来が保証されている。ほとんどの材鑑標本は、顕微鏡観察用永久プレパラートが作られている。

さく葉標本は中央図書館五階の標本室に展示し公開している。しかし、散逸と損傷を防ぐため貸出には応じていない。材鑑標本は農学研究院木質資源科学研究室に保管され、インターネットでの公開が計画されている。

参考文献

『九州大学農学部五十年史』、九州大学農学部、一九七二
『大学所蔵標本総覧』、日本学術振興会、一九八二
九州大学総合研究資料館設置準備委員会編『九州大学所蔵標本・資料』、一九八五



国産材の材鑑標本

戦時の空襲による火災への対策から、貴重な外国産材の標本は二分され、一方は九州大学に、他方は現森林総合研究所に送られ保管された。材鑑から作製された永久プレパラートは、各方面から依頼される樹種同定(識別)に活用されている。

初島^{はつしま}コレクション

■ 概要

受入…二〇〇八年
数量…約一万点
収蔵場所…中央図書館五階標本室、農学部篠栗演習林内標本室、総合研究博物館内
管理部局…農学研究院および総合研究博物館

■ 受入経緯

初島^{すみひこ}住彦は、戦前から戦後にかけて博物研究が福岡において興隆した時期を飾る研究者の一人である。一九四八年に鹿児島農林専門学校に転任した際、外地演習林（台湾、北鮮、南鮮、樺太）における在外調査時や学生実習担当時に採集した植物標本、九州一円で採集した植物標本を、九州大学に残した。これらを総じて「初島コレクション」と呼んでいる。台湾、北鮮、南鮮各演習林標本は中央

■ 公開

総合研究博物館における手続きののち、一部が中央図書館五階標本室で閲覧可能である。

（三島 美佐子）



図書館五階に収納されている。その他は農学部篠栗演習林内標本室に収納されており、順次総合研究博物館に移設されつつある。

■ 特色

初島コレクションには、約五〇点のタイプ標本が含まれており、貴重な資料となっている。残念ながら、長期保存の過程で消失あるいは虫害されたものもある。初島は、金平亮三教授とともに、ミクロネシア・ニューギニア調査に携わるとともに、一九四三年から終戦までボゴール植物園に勤務し、調査研究に携わった。総合研究博物館には、九州大学在職時の初島の業務日記が託されており、学術標本資料とあわせた標本歴史学的資料として興味深い。

参考文献

- 九州大学総合研究資料館設置準備委員会編『九州大学所蔵標本・資料』、一九八五
- 九州大学総合研究博物館編『九州大学所蔵標本・資料』、二〇〇五
- 初島住彦「九州植物目録」『鹿児島大学総合研究博物館研究報告』二、二〇〇四



初島コレクション概観（一部）

中央図書館5階の標本室にある初島コレクション標本棚。点数は多くはないものの、初島自らが作成した丁寧な押し葉標本が、整然と収蔵されている。

瀬川コレクション

本コレクションは、旧名で言えば九州大学農学部水産学科水産学第二講座（現水産増殖学研究室）の教授であつた瀬川宗吉そうきちが、一九三〇年代から日本全国で採集した海藻類のさく葉標本（押し葉標本）の集積体である。戦前の日本の領土を反映して、南は台湾、北は樺太（現サハリン島）の標



1. 標本庫



2. 収納状況



3. 『原色日本海藻図鑑』初版



瀬川宗吉 (1904~1960)

本をも含む貴重なコレクションである。

本コレクションの数千点に及ぶ整理済み（種名が決定されている）標本は、種毎にまとめられ、分類群順に、水産増殖学研究室海藻類標本庫内の特注の標本ケースに収納されている（写真1、2）。整理済み標本の他に、種名が決定されていない未整理の標本も多数あり、これらも含めると総数優に一万点を超えると思われる。

瀬川コレクションの特筆すべき点は、整理済み標本の中から、日本産五九二種（緑藻類一〇七種、



4. 図鑑 (PLATE 64)



5. 図鑑基準標本 No.512
（紅藻このはのり）



6. タイプ標本
(*Platoma izunosimensis* Segawa)

褐藻類一二九種、紅藻類三五六種）について代表的な一枚が選定され、それらの標本に基づき、一九五六年に『原色日本海藻図鑑』（保育社、写真3）が作られたことである。この図鑑は若干の改訂は経たものの、日本産海藻類約一四〇〇種の半数近くを示し、且つ種の区別ポイントの記述があり、専門家にも長く種の検索に利用されてきた重要な文献の一つである。この図鑑に用いられた標本には、図鑑基準標本の印が押され、その上に手書きで標本番号が記されており、図鑑作成当時の瀬川の思いが伝わってくるようである（写真4、5）。残念ながら、何らかの理由で欠失した標本もあるが、大半の図鑑基準標本は本コレクション中に保存されている。現在、これらも含めて約一〇〇〇点の標本情報が、九州大学総合研究博物館の瀬川コレクションデータベースとしてインターネット上で公開されている。

瀬川コレクションの中には、瀬川が新種として記載した種の基準となった標本（タイプ標本）も一部含まれている（写真6）。

（川口 栄男）

たけのうち こうけつ 竹内・纈纈コレクション

■ 概要

本コレクションは、一九二〇年農学部開設時に設けられた植物学教室の初代教授である纈纈理一郎と助手の竹内亮により、一九二二年から二〇年間にわたり九州全域で収集された約一万点の種子植物、シダ植物からなる植物標本である。箱崎キャンパスの農学研究院が管理する総合研究博物館標本室で閲覧可能である。

■ 特色

一九二〇年代から一九三〇年代における九州一円の種子植物およびシダ植物の大部分が網羅されている。特に、暖地性植物の分布北限地でありながら、宗像大社の神域として調査収集ができなかった福岡県宗像市にある沖ノ島の学術調査が一九三二年、一九三三年に行われ、その際収集された貴重な植物標本が収納されている。その総数は、タイプ標本のオオユリワサビを含む



竹内・纈纈コレクションのさく葉標本を保管している標本棚。

維管束植物七二科一八〇種(約五〇〇点)、蕨類一四科一七種(約二〇〇点)、地衣類六科一七種(約三〇〇点)である。これらの植物標本は、信仰の掟から調査が出来ない沖ノ島の植生を知ることがりとなる資料で、学術的価値が高い。その他、本コレクションの特色は、スミレ科植物の標本が多いことである。九州地域のみでなく日本各地のスミレ科植物の貴重な主要種が収集保存されている。その総数は三九種(三五九点)である。本コレクションは、大正から昭和初期において九州一

参考文献

- ※本コレクションに関連した学術論文は二十数編に及ぶが、主要な文献は次のものである。
- 九州帝国大学農学部植物学教室『福岡及其近郊植物目録』、一九二五
- 竹内亮「沖ノ島学術調査報告(二) 一 沖ノ島の植物生育相(予報)」『福岡博物学雑誌』一四、一九三三
- 竹内亮「沖ノ島産維管束植物目録(予報)」『福岡博物学雑誌』一六、一九三五

■ 公開

九州大学の教官、学生の学術研究の利用のほか、学外の多くの研究者、植物同好会員の利用、外国からの問い合わせが多い。

(縣 和 二)



オオユリワサビのタイプ標本
福岡県沖ノ島で採集。

天草近海浅海動植物相コレクション

九州大学理学部附属天草臨海実験所（英名では天草海洋生物学研究所）は一九二八（昭和三）年に現在の天草郡苓北町富岡^{れいほく}に設立され、以来八〇年余となった。琉球大学の瀬底臨海実験所（現在の琉球大学熱帯生物圏研究センター瀬底実験所）が一九七一年に設立されるまでは、長らく日本で最も南に位置する実験所であった。

沖合には黒潮の分流である対馬暖流が流れるため天草諸島西沿岸域は温暖な海洋気候となり、海洋地理学的には亜熱帯区（西九州亜区）に属する。また東側には日本有数の内海で、干満差が日本一の有明海、八代海があり、熊本県は日本最大の干潟面積を誇る。外洋から内海まで、多様な沿岸生態系が見られることから、当然ながら海洋生物の多様性も高く、約一万種の海洋生物が生息すると推定されている。創立以来、多くの歴代の所員によつて天草周

辺海域の海洋生物が採集され、研究されてきた。また、日本で最も南に位置した実験所には、多くの海洋生物の分類学者が訪れ、各分類群について詳細な研究が積み重ねられてきた。その中で、採集された生物の一部がこれまで知られていない新種として記載され、また国内で初めて採集された生物が、日本初記録種として報告されている。その際の学名（種名）に、採集地である amakusa がつけられたり、和名に「アマクサ」が冠せられたりした種も少なくない。例えばアマクサアメフラシ、アマクサキリンサイ、アマクサクラゲなどがその例である。最近では、一九九〇年造礁サンゴの新種が発見され、アマクサオトゲキクメイシ（*Acanthastrea amakusensis*）の名前がつけられた。新種記載の際に基準となる模式標本こそないものの、それらの多くの海洋生物は天草臨海実験所の標本庫に乾燥及び液浸標本として保存されている（約九千点）。また集められた海洋生物の標



アマクサキリンサイ (*Eucheuma amakusaense*)

和名にも学名にもアマクサの地名がつけられている。模式標本は天草牛深で採集され、1902年に新種記載された。当時は九州西岸の水深10～20mに多産と記されているが、現在天草西岸及び牛深では希少種となっている。地元天草では食用に供されてきた。



アマクサアメフラシ (*Aplysia juliana*)

和名にアマクサの名前がついたアメフラシで、温帯から熱帯にかけての沿岸域に広く分布する。いわゆるアメフラシと混在するが、アメフラシはつつくと紫色の液を出す、この種は出さないこと、また足の裏にあたる部分がくびれていることなどから区別される。



アマクサオトゲキクメイシ
(*Acanthastrea amakusensis*)

牛深沖で採集された標本が模式標本となり、1990年オーストラリアの研究者 Veron によって新種記載された。比較的稀な種であるが、南日本沿岸のみでなく、アジア、太平洋のサンゴ礁域でも見つかっている。当初は *Acanthastrea* 属の一種とされたが、2000年 *Micromussa* 属に変更された。

本や採集記録をもとに一九六〇年から一九七八年にかけて天草臨海実験所近海の生物相として編集され、第一集の貝類から第一〇集の扁形動物渦虫綱及び紐型動物まで、計一〇冊が出版されている。

本来なら、それらの貴重な標本の写真を掲載すべきところだが、多くの標本が微小であり、また退色した液浸標本などでは、判別しにくいことも考え、今回はアマクサを冠した海洋生物の生態写真を載せることとした。

（野島 哲）

魚類生活史標本
―内田コレクション―

■ 概要

数量…一六三九点、約五〇〇〇〇個体
収蔵場所…総合研究博物館

■ コレクションの特色

内田コレクションは、九州大学農学部水産学科水産学第二講座（現水産増殖学研究室）初代教授内田恵太郎が収集した二九目九七科約二〇〇種の魚類標本である。本コレクションは内田が朝鮮総督府水産試験場技師時代（一九二七～一九四二）に朝鮮各地で採集したもの（「朝鮮魚類誌」）および九州帝国大学赴任後（一九四二～）に九州および日本各地で採集した魚類（『日本産魚類の稚魚期の研究』一、『稚魚を求めて』ほか）からなる。

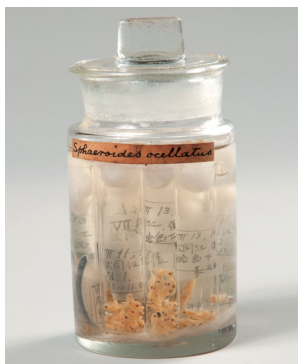
本コレクションの特筆すべき特徴として、多くの魚種について、卵、前期仔魚、後期仔魚、稚魚に至る初期生活史のシリーズ（発育段階標本）が公表されたスケッチ原図および未公表のスケッチ原図、計三二二点も同データベース内で公開している。

（望岡 典隆）



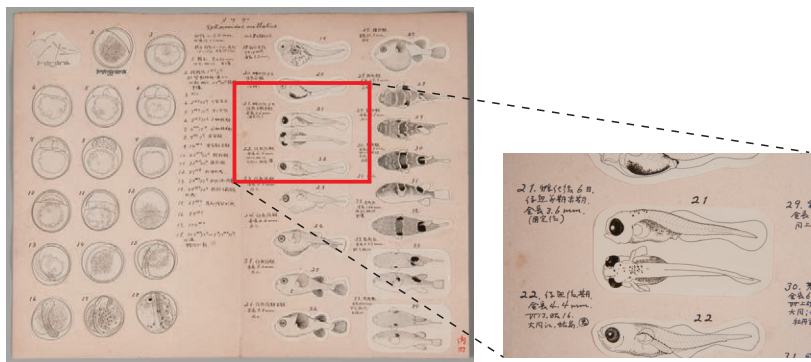
タイリクバラタナゴ（コイ目コイ科）
（KYUM-PI-UTD-1345～1353, 1365～1366）

アジア大陸東部と台湾が原産。日本へは1940年代に長江からハクレンやソウギョの種苗に混入し移植された。写真のボトル内の標本は、本種が日本に移植される前の1924～1937年に朝鮮半島慶尚南道昌寧郡ほかで採集された卵～成魚標本。



メフグ（フグ目フグ科）
（KYUM-PI-UTD-778～804）

黄海から南シナ海およびこれらの海域に注ぐ河川に生息。繁殖期に河川に遡上し、淡水域で産卵する。写真のボトル内の標本は1937年5月に平壤で採集した成熟親魚から人工授精で得た卵および大同江で1941年6～7月に採集した仔稚魚標本である。



メフグ（フグ目フグ科）
（KYUM-UTD-S-238）

メフグ生活史標本に基づく内田のスケッチ原図。精子の形態および卵内発生から老成魚（全長420mm）まで。



内田恵太郎（1896～1982）

東京神田小川町で生まれる。東京帝国大学農学部水産学科卒業、岸上鎌吉教授に師事、同農学部講師、朝鮮総督府水産試験場技師を経て、九州帝国大学教授。この間、精力的に魚類の生活史研究を進め、世界の稚魚研究をリードし、多くの魚学者を育成した。

整っていることが挙げられる。とくに、朝鮮半島における淡水魚生活史標本は極めて貴重な学術標本と評価されている。また、内田のスケッチは精緻を極め、国内外の魚類学者の手本となっている。そのスケッチには形態や生態に関する知見や他種との識別点が詳細に附されている。

■ 公開

本コレクションは九州大学総合研究博物館海洋生物標本データベース内で公開しており、検索可能である。また、内田の著書および原著論文

参考文献

- 「朝鮮魚類誌」「朝鮮総督府水産試験場報告」六、一九三九
『日本産魚類の稚魚期の研究』一、九州大学農学部水産学第二教室、一九五八
『稚魚を求めて―ある研究自叙伝』、岩波新書、一九六四

動物標本



クビワオオコウモリ
学名 *Pteropus dasymallus*
哺乳綱翼手目オオコウモリ
科オオコウモリ属

大型のコウモリで、南西諸島に四亜種、台湾に一亜種が分布している。以下の亜種は体の大きさや首の周りの毛の色とその分布から識別できる。エラブオオコウモリ (*P.d. dasymallus*, 口永良部島とトカラ列島に分布) ダイトウオオコウモリ (*P.d. daioensis*, 大東諸島だけに生息) オリイオオコウモリ (*P.d. inopinatus*, 沖縄島に生息) ヤエヤマオオコウモリ (*P.d. yaeyamae*, 八重山諸島に生息) タイワンオオコウモリ (*P.d. formosus*, 台湾に生息)

エラブオオコウモリ、ダイトウオオコウモリは国指定天然記念物(環境省レッドリスト絶滅

危惧ⅠA類)。成体の頭胴長は二〇センチ、前腕長は一二センチを超え、翼を広げると五〇〜一〇〇センチにもなり、目が大きく鼻面が突出している。その外見から「空飛ぶキツネ」とも呼ばれる。超音波を使わずに有視界飛行をする。草食性で樹木の若葉や果実、花の蜜等を食べるが、夜行性なので昼間は木の枝にぶら下がり眠っている。しばしば栽培されている果樹に被害を与える。



トゲネズミ
哺乳綱齧歯目ネズミ科トゲネズミ属

トゲネズミは国の天然記念物(絶滅危惧ⅠA類)で、かつて一属一種と考えられてきたが、現在では三種の独立種であると考えられている日本固有種である。鹿児島県奄美大島(アマミトゲネズ

ミ *Tokudaia osimensis*)、徳之島(トクノシマトゲネズミ *Tokudaia tokunoshimensis*)、沖縄県沖縄本島(オキナワトゲネズミ *Tokudaia muenninki*)の三つの島にのみ分布する。トゲネズミは先端が尖った二〜三センチの硬い棘状の毛で全身が覆われており、頭胴長約一五センチ、尾長約一〇センチほどの黒褐色のネズミである。夜行性で、主に照葉樹林内に生息し、シイの実や昆虫類などを食べる。トクノシマおよびアマミのトゲネズミはXO型性染色体を持つ。



ケナガネズミ
学名 *Diplothrix legata*
哺乳綱齧歯目ネズミ科ケナガネズミ属(一属一種)

ケナガネズミは一属一種の学術的に大変貴重な日本固有種で、国指定天然記念物である。沖縄島北部、奄美大島、徳之島に分布する。日本のネズミのなかでは最大の大きさである(頭胴長二二〜二三センチ、尾長二四〜三三センチ、体重〇・三〜〇・四キログラム)。背面にはまばらに長さ五〜



センカクモグラ
学名 *Nesocaptor uchidai*
哺乳綱食虫目モグラ科ニホンモグラ属

六センチの固く長い体毛が生えている。全体としては黄褐色を呈し、腹面は暗褐色である。尾は非常に長く、樹上でバランスを取るのに適しており、先端部が白いのが特徴である。四肢には鉤状になった鋭い爪が生えている。夜行性で、主に樹上で生活する。食性は雑食性で、果実、シイの実などの種子、樹皮、バッタ・コオロギなどの昆虫類も食べる。

九州大学の白石、荒井によつて、尖閣諸島の魚釣島において偶然採取され、一九九一年に新種と同定された。採取個体は一個体のみで、その生態など詳しいことは分かっていない。頭胴長は二三センチ、尾長一二センチほどの小型のモグラで吻が短い。アズマモグラやコウベモグラは四二本、ミズラモグラは四四本の歯を持つが、センカクモグラは三八本の歯しか持っていない。

(飯田弘)

日本有数の骨格資料

—日本人起源論に用いられた
古人骨資料ほか—

■概要

受入…二〇〇五年一〇月

数量…人骨資料約三〇〇〇体、脊椎動物骨格
標本約二七〇体

収蔵場所…総合研究博物館第一分館

■受入経緯

かつて医学部解剖学教室に収蔵され、一九九四年度に比較社会文化研究科(当時)考古人類資料室に移管後、二〇〇五年度に総合研究博物館に移管された。

■学術的意義

人骨資料は、医学部解剖学第二講座が、一九五〇年から一九八八年まで、金関丈夫教授かなせき たけお(八九七～元八三)、永井昌文教授まさふみ(一九二四～一九八八)の二代にわたる研究活動によつて収集した西南日本古人骨資料と、同講座で前々から作製してきた近現代

いる。

近世人骨のうち、久世家八代の人骨は、骨格の遺伝性研究の基礎資料として著名である。

近現代人骨格標本は、西南日本人骨格を知る上での基本資料であり、金関家二代の人骨は、骨格の遺伝性研究の基礎資料である。

そのほか、南海産巻貝製貝輪研究に大きな貢献を果たした永井の貝輪制作実験資料(ゴホウラ・イモガイ・オオツタノハなどの切断片)は、学史資料として貴重である。

脊椎動物骨格標本は、帝国大学時代に医学部



渡来的形質の拡散

左が弥生人、右が古墳人。上段が朝鮮半島に近い地域出土で渡来的形質が強く、下段に行くほど弱まる。



縄文人(左2点)と弥生人(右2点)

縄文人は福岡県山鹿貝塚出土、弥生人は福岡県金隈遺跡出土で、顔つきが異なる。

■公開

古人骨資料約七〇体、動物骨格標本を、九州大学開学記念日など年数回公開している。

(岩永省三)

人骨格標本であり、解剖学・自然人類学の教育研究に活用されてきた。

古人骨資料は、弥生・古墳時代を中心に縄文時代から近世に至るもので、質・量ともに日本有数の資料である。特に、縄文時代の山鹿貝塚、北部九州から山陰地方の弥生遺跡出土人骨(土井ヶ浜遺跡一九〇体、古浦遺跡四八体、中の浜遺跡一二三三体、金隈遺跡一三六体、永岡遺跡五四体、三津永田遺跡四二二体など)、西日本各地の古墳出土人骨、吉母浜遺跡一八八体ほかの中世人骨、博多天福寺遺跡をはじめとする近世人骨など、西南日本人の骨格形成・形質変化を知るうえで極めて重要な資料である。日本人起源論における今日の定説の基礎をなした金関による渡来混血説は、これらの資料から生成されたものである。また、その後の多くの研究者による日本人起源論に用いられ、永井による渡来形質拡散の地域差の研究を生み出す元にもなり、現在も頻繁に研究者が資料調査に訪れて

解剖学教室が購入した標本であり、比較解剖学の教育に用いられてきた。系統的な交連こうれん(生きている時のように繋がった)全身骨格標本が多く、動物の骨格を比較する上で貴重な標本であるとともに、今日では稀有な種を含むことから学術的価値が高い。また日本列島産動物については分解標本もあり、動物考古学の基礎資料としての活用が期待できる。内訳は、魚類、両生類、ワニ・ヘビ・カメなど爬虫類、絶滅危惧種に指定されている希少種ヒクイドリなど鳥類、ウマ・トラなど大型哺乳類、旧世界サル・新世界サルを含む多種多様な霊長類などで、脊椎動物の多様な世界を概観できる標本群である。またナウマンゾウ・サイなどの化石資料もある。

江崎文庫 — 国宝級の蔵書 —

江崎文庫とは、江崎悌三教授の貴重な蔵書を、その没後に昆虫学教室と彦山生物学研究所が共同購入してから呼び習わした名称である。江崎の収集癖はつとに著名で、書籍とくに和洋の古書も例外ではない。これはと思った古書は惜しみなく私財を投じて購入した。江崎文庫は今や九州大学附属図書館の蔵書として大事に所蔵されているが、その内容は、洋書九三点一五七冊、和書（本草学関係と漢古書）七二二冊に及んでいる。これほどの蔵書は当節絶対に集められない。

洋書は江崎が大学卒業と同時に九州帝国大学助教教授に任せられ、その年の暮れすなわち大正二二（一九三三年）二月から五年間ヨーロッパ各国に昆虫学研究のために留学したときに購入したものが主体である。江崎はヨーロッパの主要国のすべてを巡歴し、各地の研究所、博物館、大学を訪問した。とくに当時著名な研究者がい



江崎悌三 (1899~1957)
九州大学教授在職中に逝去。享年58歳。勲二等瑞宝章。博覧強記で語学に堪能な学者として有名。江崎の人格や学識を慕う人は多かった。学内では農学部長、教養部長を歴任。『江崎悌三随筆集』、『江崎悌三著作集』3巻がある。

たハンガリーのブダペストの国立博物館には四回も訪問し、長期滞在して研究をしているが、その当時の話はいまでも現地で語り継がれているという。筆者は、ビショップ博物館のグレスitt博士の招待をうけて、昭和四四（一九六九）年パプアニューギニアに学術調査のため約六ヶ月滞在した時、同伴者であつたハンガリーのパログ博士から直接その話を聞いた。日本から来た若くて研究熱心で語学に長じた昆虫学者が彼の地では今も語り草になっているのである。



江崎文庫洋書の保管状況
和書（本草学関係と漢書）は別置されている。

が、本を借りに行くと、その本はどの書棚の何番目の棚のどこにある、ということ間違ひなく教えていただいた。この記憶力には舌をまいたものである。

江崎文庫の洋書については勿論昆虫学関係のものが多いのであるが、筆者が一番驚いたことは、動物の学名の出発点となつたリンネの *Systema naturae*（一七五八発行の第一〇版）もさることながら、その前年発行の C.A. Clerck の *Svenska spindlar* … も入っていることである。この本のクモの学名はリンネよりも優先権がある

とされているが、動物命名規約によつて発行はリンネにあわせて一七五八年と規定されている。クモは昆虫ではないが、当時江崎はすでにクラークの著書の重要性を認識していた証拠である。

また、リンネ以前の生物学で著名なものはイタリア人博物学者（医師、詩人）*Portia*（一六二六～一六九七）である。レディーは実験によつて腐肉中のウジは自然発生ではなく、親のハエが生んだ卵から発生したものである、と証明した。そのレディーの著書（一六八四）も江崎文庫にある。これも驚きである。

尚、江崎文庫の中の一六〇〇年代の古書は、Moffet の昆虫書（一六三四）、Swamedam の昆虫書（一六八二）と上記のレディーの本がもう二冊（一六八五、一六八七発行）ある。一七〇〇年代のものになると急に数が増える。

和書の本草学関係と漢古書は、京都大学の動物学者・博物学者の上野益三氏の蔵書に比肩すべきもので、この両者を合わせれば必ずや国宝級の扱いを受けるであろう。この両氏の蔵書はそれほど徹底した貴重なコレクションである。

（平嶋 義宏）

ELKU昆虫タイプ標本

概要

コレクション開始…大正一〇（一九二二）年
数量…約三〇〇〇点
管理…農学研究院昆虫学教室

所蔵経緯

タイプ標本（模式標本）は、分類学上新種等の分類単位（タクソン）が設立され、記載命名された時に用いられた標本で、その中の一個体をホロタイプ（完模式標本）、同時に用いられたこれ以外の標本で指定されたものはパラタイプ（副模式標本）と呼ばれる。新種の記載にあたっては、その分類単位が他の分類単位と明確に区別できる標徴を明らかにし、それによって容易に、かつ正確にその分類単位を同定できるようにしなければならない。もし後世その種に分類学上の問題が生じた時には、タイプ標本を直接検討することが必要になる。そのため、タイプ標本は公的な研究機関に保存して

スタッフ、院生等によって記載されたタイプ標本、教室のコレクションに基づいて学外の研究者によって記載されたタイプ標本、および寄贈されたタイプ標本からなる。

特色

教室創設以来のコレクションのため、多くの分類群にわたっており、北海道大学所蔵の昆虫類タイプ標本とともに、日本を代表する昆虫類タイプ標



九州大学農学研究院昆虫学教室所蔵のタイプ標本データベース (ELKUType)
ELKUType を含む昆虫学データベース (KONCHU) は約35万件のアジア・太平洋地域産昆虫種情報を Web 上に公開している。



九州大学農学研究院昆虫学教室所蔵のタイプ標本

おくべき重要な標本である。九州大学農学研究院昆虫学教室所蔵のタイプ標本は教室創設（大正一〇〔一九二二〕年）以来、江崎悌三^{ていそう}、安松京三^{けいそう}、平嶋義宏^{ひろ}、森本桂^{かづ}、湯川淳一^{ただちゆき}、多田内修^{たうちゅう}の各教授時代の本コレクションである。コウチュウ目の七八九件（登録済み分）を筆頭に、ハチ目、カメムシ目、チョウ目などが多い。一般昆虫類標本同様、アジア・太平洋地域産のタイプ標本が多く、常時国内外からのタイプ標本貸出し依頼がある。最近では台湾、韓国が開始した国外研究機関所蔵タイプ標本データベースプロジェクトに協力している。

公開・発信

九州大学昆虫学教室所蔵タイプ標本データベース (ELKUType) をウェブ上に公開している。ELKUType は主としてホロタイプに関するデータベースで、各レコードには、学名、和名、目名、科名、原著者、命名年、原記載の出典、タイプの種類と雌雄、タイプ産地、国、保存形式、パラタイプの有無、画像等一九項目を収録している。

URL: <http://konchudb.agr.agr.kyushu-u.ac.jp/elkutype/index-j.html>

（多田内修）

参考文献

平嶋義宏・森本桂・多田内修『昆虫分類学』、川島書店、一九八九

昆虫類一般標本コレクション

概要

コレクション開始…大正一〇（一九二一）年
数量…約三五〇万点
管理…農学研究院昆虫学教室他

収蔵経緯

九州大学農学研究院昆虫学教室所蔵の昆虫類一般標本コレクションは教室創設（大正一〇「一九二二年」）以来、江崎悌三、安松京三、平嶋義宏、森本桂、湯川淳一、多田内修の各教授時代のスタッフ、院生等によつて蓄積されてきたものである。特に、創設期の江崎教授は、着任以来昆虫学分野の研究の基本となる昆虫標本と文献の収集整理の実現にきわめて熱心に取組み、この方針は以後も歴代教授により受け継がれている。また、杉谷（朝鮮半島北部産を含むチョウ目）、徳永（ユスリカ類）、北川（アミカ類等）、立川（天敵寄生蜂類）、中條（アジア産甲虫類）、福田（北海道産ハナバチ類）

般標本コレクションである。特にコウチュウ目（約七〇万点）、ハチ目（約五〇万点）、カメムシ目（約二〇万点）、チョウ目（約二〇万点）、ハエ目（約三〇万点）が充実している。昆虫学教室ではミクロネシア（江崎・安松）、パプアニューギニア（平嶋）、韓国（森本）、インドネシア（湯川）、中国、中央アジア（筆者）など多くの海外学術調査プロジェクトを組織し実施してきた。これら調査によるアジア・太

平洋地域産の昆虫コレクションに特色がある。また、農学研究院昆虫学教室以外（比較社会文化研究院は別記）にも、九州大学総合研究博物館（佐々治、宮川、大塚、烏山等の各コレクション）、熱帯農学研究センター（アリ類）、附属彦山生物学実験施設（福岡県英彦山周辺の昆虫類）などで昆虫類の標本を収蔵管理している。

公開・発信

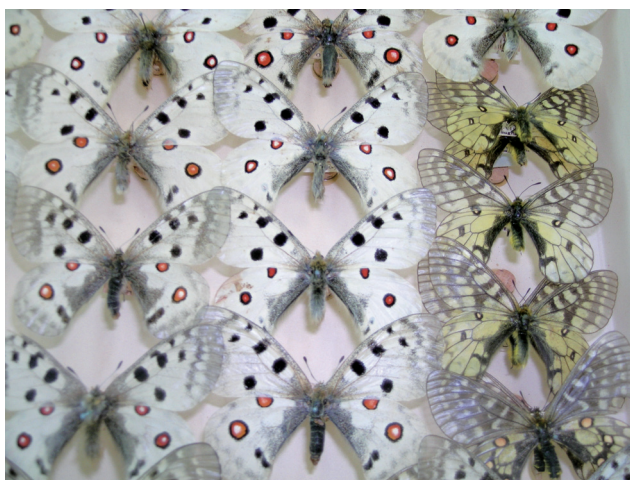
九州大学昆虫学教室所蔵一般標本については、アジア・太平洋地域産昆虫類のタイプ標本および種情報データベース（AIC）として、現在一部標本ファイルデータベース化し、ウェブ上に公開している。

URL: <http://aiic.jp/j-top>

（多田内修）

参考文献

『九州大学農学部五十年史』、九州大学農学部、一九七一
九州大学総合研究博物館『九州大学所蔵標本・資料』、二〇〇五
文部省学術国際局情報図書館課『大学所蔵標本自然史関係の実態調査報告』、一九八〇



アゲハチョウ科ウスバシロチョウ類標本
杉谷コレクション



外国産カメムシ類標本
昆虫学教室初代教授江崎悌三により収集された標本。

の各コレクションなど、学外から寄贈された貴重なコレクションも加わっている。

特色

昆虫学教室創設以来のコレクションのため、多くの分類群にわたっており、日本最大の昆虫類一

アジア産昆虫類標本

比較社会文化研究院の生物多様性講座には、アジア地域を中心に世界中から集められた一〇〇万点以上の昆虫標本が所蔵されている。標本数ではハエやハチが最も多く、コウチュウやチョウがそれに続く。これらの標本は、旧教養部時代から歴代の教員が中心になって長年にわたり収集し、研究してきた貴重な学術標本である。

学術標本の中でも、新種や新亜種を記載・命名する際に指定される世界中で唯一の標本をホロタイプ (HOLOTYPE) という。ホロタイプは厳重な保管が義務付けられており、チョウやハエをはじめとする昆虫の数多くのホロタイプを所蔵している点が、本講座の特徴である。ホロタイプを豊富に所蔵することは、本講座の系統・分類学における研究の活発さを物語っている。

特に、旧教養部で長年教鞭をとった白水隆名誉教授や、その教え子の中でもチョウの系統・分類や生物地理を主に研究した矢田脩名誉教授たちは、



しろうすたし
白水隆 (1917～2004)

福岡市に生まれる。九州帝国大学農学部で昆虫学を学んだ。1942年、九州帝国大学農学部へ奉職、1963年、九州大学教養部教授に昇任、1981年、定年退職。その間、チョウの系統・分類学や生物地理学で画期的な研究業績を挙げるとともに、多数の研究者を育てた。アマチュアのチョウ研究家の指導を熱心におこなったことも特筆される。

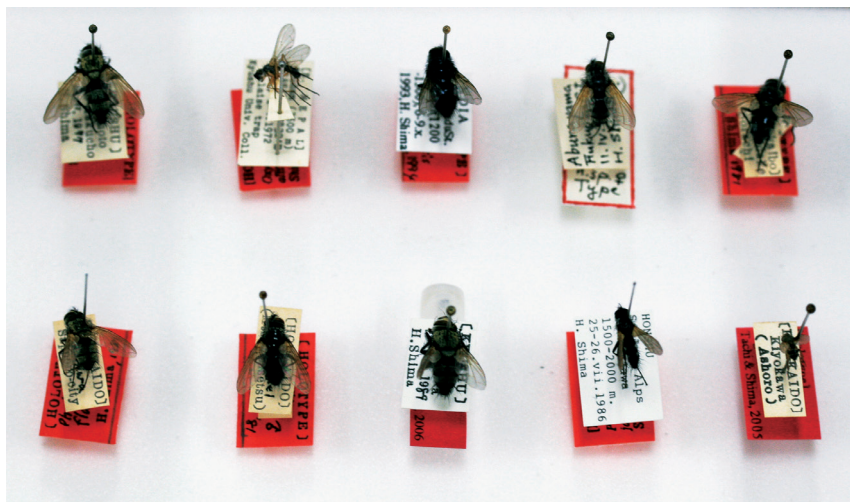
熱帯アジア産シロチョウ科の一大コレクションを作り上げた。三枝豊平名誉教授や嶋洪名誉教授が中心になって作り上げた膨大なハエ類のコレク

ションも内外に知られている。最近、伊都キャンパスで筆者と大学院生によって発見されたタマバチの新種のホロタイプも所蔵標本に加わった。これらのアジア産昆虫標本は、今後、アジア地域にお

(阿部 芳久)



アジア産シロチョウ科のホロタイプ標本の一部



アジア産ヤドリバエ科のホロタイプ標本の一部

江崎悌三教授とシャルロッテ夫人

ていそう

「江崎文庫」などで紹介した江崎悌三は、大正一二年東京帝国大学理学部を卒業と同時に九州帝国大学に助教授として赴任し、同年ヨーロッパに留学した。留学中にウィーンで開かれたエスペラント学会に出席した際、大会書記だったシャルロッテさんと知り合う。

二年後にハンガリーのブダペストで開かれた同学会で二人は運命の再会をすることになる。大恋愛の末「東洋の果てに一人娘はやれない」という父親の反対を押し切つて、ドイツのヘルフォルト市で挙式し、シャルロッテさんは昭和三年に福岡にやってきた。彼女は母国語のほか、英語、ラテン語なども堪能で、戦後は福岡外事専門学校（福岡大学の前身）や福岡女子大で独語、英語を教え、九州大学医学部を中心に発足した西日本日独協会の創設にも参加し、独語クラスを受け

持った。また、九州大学に海外から有名な学者が訪れるたびに、ホステスとして活躍し、今でも江崎家のサイン帳には案内した世界の一流学者の署名が多数残っている。四人の子を育て、長男の悌一氏（日航ほど号ハイジャック事件の時の副操縦士）がパイロットになると、時々ドイツに里帰りし、日本で習った生け花をドイツ婦人に教えるため剣山をもつてドイツ各地をまわった。よど号事件の時には、周囲の動転をよそに、「すしも騒がず、その間大阪で開かれていた万国博見物をしていた」という肝っ玉かあさんでもあった。（参考…西日本新聞昭和五三年六月二九日付、夫人追悼記事）

（多田内修）